

平成27年度 第18回大仙市教職員研究集会

平成27年8月4日(火) 全体会：13時30分～16時(大曲市民会館大ホール)

例年であれば、大仙市教職員研究集会の全体会は、喫緊の教育課題や時代の要請等に
応じ、実践発表やフォーラム等の内容で実施していましたが、今年度は、大仙市が誕生
して10年という節目を迎える年であることに加え、7月から新たな教育委員会体制
となったことを踏まえ、次のような内容で実施しました。

○新教育委員会委員等紹介

○吉川教育長講話

○大仙市教育10年間の総括

・大仙市教育10年間の足跡

・全国消防職員意見発表会最優秀賞受賞報告(新田理沙消防士)

・三浦前教育長からのメッセージ

○今後の展望(対談)

特に、「吉川教育長講話」、「三浦前教育長からのメッセージ」、「今後の展望(対談)」
につきましては、今後の大仙市教育の方向性を示す重要な内容であることから、学校経
営や「大仙教育メソッド」における各中学校区の特色ある取組の参考にしてくださるよ
うお願いいたします。

吉川正一教育長講話「大仙市で子育てしたい～大仙市教育メソッドを目指して」

【平成27年7月1日 大仙市教育委員会教育長就任】



3月まで県教育庁に勤務し、その後3か月ほど自由な時間があ
ったので、その間にいろいろと考えたことやこのように大仙市教
育をやりたいたいという思いを少しお話ししたい。

タイトルは「大仙市で子育てしたい」～大仙教育メソッドを目
指して～。少し大げさであるが、思いだけは大きくということ
である。

7月中に9校ほど学校訪問をしたが、まずは「明るく、笑顔で、
前向きに」と話をしたところであった。「ポジティブに生きよう」。
これは、管理職にとって必要な資質であると言われている。

これから各論に入っていくが、少し視点を大きなものにして考えてみたい。

平成27年1月に東京で、全国都道府県教育委員会連合会があり、そこで中教審座長を務めら
れた安西祐一郎先生が講演で次のように述べていた。

これから先、いわゆる生産年齢人口がどんどん減っていく。14歳以下の子どもが減少し、逆
に65歳以上の老年人口が増えていくということ、我々はしっかりと把握しておかなければなら
ない。

もう一つは、世界の中産階級の割合を示したものである。2015年の段階では、日本はヨー
ロッパやアメリカと肩を並べている。これがもう少し経つと中国の割合も大きいが、インドの割
合が大きくなっていく。生産年齢の減少に加え、国の経済の豊かさがどうなっていくかという時
代で、子どもたちはどんな力をもって生きていかなければならないのか、そのために教育は何を
しなければならぬのか。そのような将来的なことも頭に入れながら進んでいくことが必要。

県教育委員会にいる時に、ある程度の学校訪問はした。小学校では、わずか1クラス30秒ぐ
らいずつしか参観できない場合もあるが、それでもかなりの状況は雰囲気として伝わり、学級の

空気感が分かる。

A小学校5年生のクラスとB小学校5年生のクラスへの訪問。どちらも立派。手の挙げ方、立ち方、話し方、発表態度、もちろん座り方もしっかりとしていた。でも何かがちよっと違うなあという感じがした。

A小学校は、先生の発問に対して、分かった人はすっと手を挙げ、先生が指名して答え、終わればまた次へと流れる。

B小学校では、先生が発問すると同じようにある子どもが発表するが、次に進まないでその子の発表が終わるとまたすぐに手が挙がる。いわゆる違う意見だとか、似ているけど少し違うなどと答えていた。この違いは大きいかなと思う。

一方で、去年、県教育次長として、県内の全日制高校50校あるうち38校ほどを訪問した。「黒板に話しかけている先生」、「TTをしているがそのうちの一人は窓際で腕を組んでいるだけの授業」、「一生懸命にシート学習をしているが自分は黙っている授業」、そういった授業が実は7割方であった。県の校長会の時にそのことを話した。果たしてこれでいいのかなということの問題を投げかけた。

「百マス計算」で有名な陰山先生の話であるが、やっぱり授業改善と言っているが、まずは結果を出すことを考えなければならない。それから方法論ばかりに目が行く。確かに導入・開発などいろいろな工夫をしている。一番大事なものは、方法論の前に教材研究である。私もやはりそれが一番だなと思う。どんな教材を使えばいいのか、教科やカリキュラムの研究にもっと時間をかけるべきだなと思う。そのための意欲喚起と必要な教材が相まって子どもたちが学ぶ力を付けていく授業につながっていくのではないかなと思う。

私が訪問した市内の9校は、そういった方向にいらっていると実感した。このことから、大仙市の教育は素晴らしいものであるという感想をもっている。

視点を変えて、子どもの発想を「本音？珍答集」で見たい。

①ベートーベンは1770年、(〇〇〇)のボンで生まれた。

正解は、「ドイツ」であるが、ある子どもは次のように回答した。(ええとこのボン)

②大豆は畑の何と言われるか？

正解は、「牛肉、肉」であるが、ある子どもは次のように回答した。(お母さん)

③「宿題」を英語にすると？

正解は「ホームワーク」であるが、ある子どもは次のように回答した(プリント)

④太陽はどちらから出てどちらに沈むか？

正解は「東から西に」であるが、ある子どもは次のように回答した。(希望から未来へ)

こんな珍答というか回答を、授業やテストでただ間違っているということで切り捨てることなく、その中に生徒指導上の配慮も含めて抱えるキャパシティが先生方にはほしい。

これからが本題。それは目指すべき学校教育ということである。NHKの仕事の流儀「就活の極意」という番組から少し紹介したい。面接に当たって、企業の担当者は、どのようなところを見ているかということについて、次のようなことを述べていた。

○人材採用支援プロは

・熱いものをもっているのか、臨機応変に対応する力があるか。

○大手コンビニ経営者と大手飲料メーカー社長は

・創造心と信頼。礼儀正しいかどうか。

○起業家は

・相手の気持ちが分かるかどうか。

○地下鉄職員(ダイヤ作成プロ「スジ屋」)は

・常に新しい発見をする人。

○包装管理士(包装設計プロ)は

・勇気がほしい。厳しい日々を乗り越える心構え。

○寿司職人は

・就いた仕事が天職と思えるかどうか。自分がその仕事に合わせる心や姿勢をもっているか。

まとめると、キーワードとして「熱意」、「創造性」、「理解力」、「観察力」、「勇気」、「ポジティブ」、「仕事観」が挙げられる。多くの会社では、このような力を備えた人材を望んでいるということ。

それでは、どんな授業を目指せばいいのか。中教審では、これからの教員に求められる資質能力を「子どもたちが主体的・協働的に学ぶ授業を通じて、これからの時代に求められる力を子どもたちに確実に身に付けさせることができる指導力」と述べている。

これからは、いわゆる知識基盤社会として、様々な知識・技能がいろいろな分野でどんどん必要になってくる。情報をしっかりと取り入れることが大切である。

言い換えると、知識基盤社会への対応には、自ら課題を発見して、新たな価値を創造する力を育てることが大事。また、少子高齢化やグローバル化への対応については、イノベーションを創



出して多様な価値観を受容し共生できる人材を育てることが必要。

それでは、実際の授業ではどうなのか。これは、「授業の本質とは」として東京大学大学院教授である秋田喜代美先生が、「教育展望」で次の4点を述べていた。

①教育の質を決めるもの

○学級の安心感や居場所感をしっかりつくること

○授業に当たっては、文化的価値のある対象物を与えて夢中・没頭するように

②考えを見える化する

○キーワードは、「試行錯誤、協働、多様な表現、議論（討論）」

③学びのつながり

○授業の質が高いということは、学んだ知識等とその授業がどうつながっているのかが実感できる授業であるということ。いわゆる細切れな授業ではなく、きちんと「前と今日、そして次」がつながっていること。これは当たり前と言えれば当たり前。このことを子どもたちがしっかりと意識できているかが大事。

④学び続ける教師

○結局、子どもたちが学び続けるためには、教材研究が欠かせない。先生方は教材研究を続けなければならない。

この四つの視点で授業の質は決まると言っている。大仙市の多くの先生方は、こういった授業を進めていると思う。井上ひさし氏は、「むずかしいことをやさしく やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく」とも述べている。このような授業でありたいものである。

とは言うものの、やっぱり忙しい。報告・調査物も多い。しかし、一番の原因はいろんな「〇〇教育」といわれる教育がどんどん増えてきたことである。

県の学校教育の指針で「〇〇教育」の数を数えてみた。昭和57年度から平成23年度まで、31も増えている。昭和57年度にはなかった「〇〇教育」が平成23年度には31も出てきている。例えば、消費者教育、人権教育、情報教育、エネルギー教育、キャリア教育、国際理解教育、防災教育、食育、インクルーシブ教育等。

つまり、県の学校教育の指針にあることは、先生方が各学校で実施しなければならないものである。あれもこれも求められる。

大仙市はそうでもないかもしれないが、都会では多いのが苦情。モンスターペアレントと呼ばれる保護者や地域からの苦情では、実際に次のようなものもある。

○「入学式に桜が咲いていないのは学校のせいだ」

○「日焼け防止、盗撮防止から水泳授業は中止しろ」

○「保護者会等で仕事を休んだ分の給与を学校で補償しろ」

昔は世間様に恥ずかしくない子どもをつくってもらいたいといった思いをもつ保護者が多かったが、だんだん消費社会になってくると、「一人一人を大切に自分の好きに、得になるように生きた方がよい」といった風潮が見られる。そういうことから、市民性（シチズンシップ）の育成が今後ますます重要になってくる。

「現在の学校での自分の仕事の成果に満足している」と回答した中学校教員は、日本では50.5%。本調査に参加した34か国の平均回答は92.6%。日本の先生方は、いろいろなことがあって、なかなか自信がもてないのではないかと。第一線で働く先生方に授業や指導面で質を精選するだけの十分な時間と環境をどう保障していくのかが、学校では校長の役目であり、教育行政としては自分の役目。

少子高齢化が大きな問題であり、昨年度の県の学力向上フォーラムで大阪大学の志水宏吉教授が、秋田県の課題を二つ挙げられた。

一つ目は、トップ層をどう伸ばすか。二つ目は、人材の流出をどう防ぐのか。一つ目は、いろいろ指導を工夫したり、大仙市でも夢の教室やコロブスの卵わくわくサイエンス事業などの施策を進めたりしながらトップ層も伸ばす手立てをしている。

問題は二つ目の課題。日本一の少子高齢化が進んでいる秋田県であり、大仙市もそのとおり。その中で志水先生は、「故郷を思うコスモポリタン」と「世界を想うローカル」の育成の重要性を

述べられていた。これを私なりに言い換えると「都市圏への地方のよさの発信」と「グローバルな感覚と知見を備えた学校による地域活性化」。これが、これから秋田県では特に求められるし、大仙市も同じ。このことを踏まえると、「キャリア教育」と「学校間連携」はとても大事になってくる。地域貢献できる人材育成と能力を伸ばす教育というタイトルになるうかと思われるが、そういった教育を進めてもらいたい。



このことに関係してくるのが、もうかなりの学校が取り組んでいる小・中連携である。京都市教委では、小・中連携の四つの段階を次のようにまとめている。

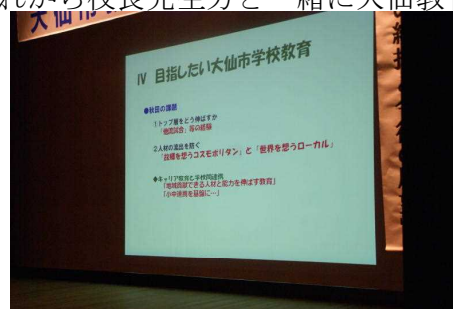
- ①子ども理解の一貫性
- ②共通した育てたい子ども像を設定
- ③学校指導の継続性
- ④学習内容の系統性

手っ取り早いのはキャリア教育。キャリア教育といったときに、まず職場体験とか体験活動などが思い付くだろう。しかし、キャリア教育が求めるものはもっと深く、日々の教科等の学習で付けた力を、次の自分のキャリアアップにつなげること。だから、体験活動と授業が離れていてはだめである。職場体験をしたときでも、常に教科等の学習と位置付けで実施することが大切。

秋田県で視察が多い市町村は、大仙市が断トツ。2位は由利本荘市か能代市。もっと凄いのは、去年も来たが今年もまた来たいということで別の人が視察に来ること。それぐらい勉強になる。これは正に財産である。大仙市の教育をブランド化させ、これから校長先生方と一緒に大仙教育メソッドをつくっていききたい。

地方の独自性という点では、第四の教育改革が始まっている。地方の時代である。自分の学校や自分の学級だけのことを頑張るのが一番であるが、この子どもたちが将来どうなるのか、大仙市はどうなるのかなど、それらを先生方はもっと意識して事に当たらなければいけない。

厳しいことを話したが、ソフトバンクの孫正義社長は「できないを言わない」ことを社員に求めた。そのためにも、明るくポジティブに取り組んでほしい。



三浦憲一前教育長からのメッセージ

【平成27年7月1日 社会福祉法人大空大仙理事長就任】

教職員研究集会の回数が18回目であるとのこと。1年に2回実施してきたので、ちょうど9年間。教職員研究集会と中学生サミットには、これには強い思い入れがある。八つの市町村が合併した当時は43校あったので、地域の実態が分からなかった。まず教職員と一体感をもつためには何ができるのかを考え、みんなが集まって情報交換や情報共有をしようというねらいで、この研修会が始まった。

私は、これは、大変な成果でないかと思っている。なぜかという、この研究集会を通して、どの地域で、どの学校で、どういうことを実践しているのかということが非常によく分かりやすく見えてきたからである。情報共有をすることでお互いの刺激となり、「私たちの地域もそういう特色があるからこういうことを頑張ろう」という姿に変容してきたことを感じているところである。

この研修会で児童生徒が発表したこともあった。それは平成22年度小学校外国語活動で、どこよりも先駆けて、国の指定を受けて横堀小学校が公開研究授業を実施した。それに高梨小と仙北中が連携していくという形で実施された。秋田県に来た当時の国の調査官が真っ先に絶賛してくれ、その頃から、子どもたちの勢いが付いてきたということを実感している。

以前は、どうも秋田県の子どもたちは、恥ずかしがり屋で抵抗感があったが、この場で発表した小学校の子どもたちは、堂々としていた。あれを見て、これは正解を求める授業だけではないということを実感した。子どもたちにどのように意欲をもたせれば、子どもたちは前に向かっていくのかということを実感した。

青森県東通村からも教育長をはじめ参観させてほしいと言ってきた。そしたら、今年また、そのメンバーが仙北中に視察に来た。目的は、小・中連携がどのようにその後進んでいるのかを確かめるため。大仙市の教育が今、非常に興味をもたれていることを感じている。研究指定校を受けた学校の先生方にも、この場面でたくさん発表してもらった。

学校教育というのは「基礎学力プラス部活」。これがずっと長年、何十年と引き継がれてきた。また、市町村合併したときの問題点は、八つの地域がやっぱりどうもバラバラでよく分からなかったこと。そのときに、その地域の特色、そこにいる先生方の特色、子どもたちの特色、基礎ができたならプラスアルファ。そういうことをやってみようではないかということから出てきたのが、地域による特色ある教育活動だった。私はこのことが非常にうれしかった。

例えば、同じ小・中連携でも中仙地域の学力をつなぐ中仙モデル。西仙スタンダードもしかり。このようなつながりがある視点をもちながら、小・中連携がぐっと始まった。

更には、環境教育ということでは大曲南地区あるいは大曲西地区の活躍もあった。全国大会まで開催してくれた。小・中学生が一緒に授業をやってくれた。そして環境大臣賞も受賞した。こ

れもまた、地域の特色を表す一つではないか。

そして、太田中が率先して行った防災教育。何とか3.11を救う手立てはないものかということで、地域との連携で被災地支援に真っ先に動いてくれた。その後、私も一緒に行かせてもらったが、子どもたちの変容する姿にびっくりした。やっぱり、あれはただごとではない。中学生が見ることによって、体験することによって感じたことや、私たちの生活では何ともならないこと、自分たちがあまりにも大それたありふれた生活をしているのではないかということなどを考え、子どもの意識改革にもつながってきたのかなということを感じた。



それを受けて、大曲中学校でも生徒会サミットを開いてどういう形で応援していくかという広がりになった。

平和中は、今では花火まで提供するようになった。鉄くずを集め花火を打ち上げるための資金をつくり、花火業者と連携しながら行っている。特に、仮設住宅の方々への訪問が増えている。合唱、演奏、ゲートボールやグランドゴルフなどの様々な交流で応援していこうという姿が非常に感謝されている。

キャリア教育では、昨年度、協和中が文部科学大臣賞を受賞した。秋田市の青年が協和のコンビニに行ったときに、協和地区の子どもたちに「こんにちは」と何回も声かけられて、びっくりしたというエピソードがあった。「私は、背広も着ていなかったし、何で私に声をかけてくれたんだろう」とびっくりしたという。それでも子どもたちは、目を輝かせて挨拶してくれたのがうれしかったということが魁新聞にも載った。挨拶運動からのキャリア教育。やはり何か自信を付けていくつながりがあったのだろう。

学校支援地域本部は、協和地区から始まった。その後神岡小へ広がっていった。今は10の学校支援地域本部がある。地域といかに連携して子どもたちを育てていくかが大事である。これらのことが、太田南小のコラボスクールの文部科学大臣賞につながった。

更には、今、大仙市を視察したいという話がたくさんある。中仙モデル、西仙スタンダードは学向上の研究指定を受けていたので、そういうところに見学させていただきたいという声は多い。これは、今も続いているのではないか。

小学校の外国語活動から、今度は小学校の英語活動ということで、改革が行われようとしている。東大曲小学校と国際教養大学との連携した取組が博報堂教育財団に認められ、今年度全国的にも先頭になるような形で、小学校英語活動としてスタートしている。そうしたら塾の先生方が東大曲小を見せてくれないかと視察に来た。以前は、学校の先生方が塾を見に行ったことはあったが、今はそういうところまで来ている。

教職員研究集会でいろいろな学校の特色を発表したり紹介したりすることによって、自分たちの学校の特色は何なのかということ、強く認識するようになってきた。全体で集まって情報共有する、あるいは人は人によって学ぶというのは正にそのとおりである。学ぶ姿勢というのは、教職員にとっても大事であると感じている。

教育にも攻めと守りがある。今言われているようなものは攻めの教育だ。基礎・基本という土台ができれば、その後は特色を出させよう。それは学校全体でもいいし、子どもたち一人一人の特徴を發揮させていくことでもいい。つまり、学校生活という集団の中で育てるのは社会力。社会力とは、人と人が付き合う力や人のために動く力である。

もう一つは、集団の中で個を生かす力である。これは、吉川新教育長も話されていたが、一人一人をどう生かしていくかが、これからの大きなテーマになるのではないかと考えている。

授業では、十把一絡げの授業はこれからは避けたい。「分かりましたね。はい、それじゃあ次。」という形ではなくて、やっぱり「あれB君、どうだったの。」と確認していく必要があるのではないか。そうするとB君はうれしくなるだろう。次の授業で、「私だってしゃべる」とそのように変わっていくのではないかと今すごく感じているところである。

前に少年院の教官と話す機会があった。「最近やはりキレル子どもが多くなってきた。我慢のできない子どもが多くなってきている。そうした子どもたちをどう指導していくのか。今、なかなか我慢する機会や場が少なくなっている。頭が優秀でもキレてしまい犯罪を犯す子どもが非常に増えてきている。これは男女問わない。」という話を伺った。

そこで、「そのような子どもたちに対して、法務省の教官はどのような対応をしたのですか。」と聞いた。「大人は正解を教えたくて、そのとおりやれよと命令口調で主張する。その子どもたちは、本当にこの人は、自分と向き合って自分のことを考えて言ってくれているのかどうかを、微妙に判断する。だから全然言うことを聞かない子どももいる。自分と心がつながったときに、よし変えていこうかという姿になる。」と教えてくれた。これもやはり教育界にも通ずることではないかなと感じた。このことは大人社会でも、今あるのではないかと思う。



今、薄くなったものが日本には三つあると言われている。その一つはテレビ。もう一つは髪の毛。そして人間関係。その人間関係力が非常に衰えてきている。だから、つながりがもてない。そういう意味では、つながる経験が大切になってくる。交流と連携の場を大いにつくってあげよう。交わろう、そして連携していこう。そして一人の子どもを一人にしない。これがいわゆる守りの教育に当たる。岩手県であるような事件が起きたときに、管理職も知らない、親も知らない、誰も周りの人も知らないというのではなくて、一人の子どもを複数で見ているときには、必ずどこかでキャッチできる。けんかなどは在り得ることだから、やっぱりどこかで守らなければならない。死に至るまで知らなかったということは、複数で見る体制ができていなかったのではないだろうか。

私は、大仙市の小学校の中で小規模校に対し、6年生に3年生の理科の専門の先生が授業に入り、国語とチェンジしていくことは、大賛成である。つまり、教科の専門家が授業に入っていくことで、子どもたちもうれしいし、専門的な指導により救われる子どももいる。大仙市は全県のどの市町村よりも多く、教育専門監を5人も配置した。この原点は子どもたちのため、更に先生方のためである。

それでもやはり小学校の先生方は大変だ。小学校の先生方はオールマイティーではない。そこで少数数学習を秋田県が真っ先に進めてきた。何とか実態をしっかりと捉えて対応していくような形が子どもたちにとってゆるぎない安定感につながる。

大仙市の子どもたちは、基礎学力も生徒指導も高い位置で安定感をもっている。ただ、やはり困っている子どももいるので、その子どもたちへどう対応していくかを常に考えていかなければならない。

オーストラリアへ行った子どもたちの感想を何年間も聞いてきたが、やってよかったなど感じている。1日目、2日目は全然お話できなかったと言っていた。さぞ辛かっただろう。ところが、3日目からは話さなければいけない。そのような体験を通し帰って来た子どもたちの姿を見ると、9日間で大きく変わったことが伝わる。そして自信を付けてきたことが分かる。「私は将来、国際関係の仕事に就きたい。」などと言えるようになっていく。

千葉大学医学部で科学的体験ができる首都圏派遣事業も大事にしてきた。秋田県は医師が少ないと言われてきた。このような体験ができる機会と場は大事である。

音楽関係では、大曲中学校のマーチング全国5連覇の活躍が挙げられる。もうこれは全国的に知られていること。このようなすごいエネルギーを大仙市の子どもたちから感じる。自信さえもてれば、もっともっと前進できるのではないかという感じである。これは、みなさんのおかげである。よそから視察に来たときに、「大仙市には素晴らしい先生がいる。」と言われる。しかし、いつも一緒にいると分からないし自分のことも分からないものである。先生方も自信をもって話をして前に進めてほしい。

そうすることによって、もっともっと子どもたちは前向きにできるのではないかと思う。何とか吉川新教育長の下で、新たな教育のメッセージを伝えていただければありがたい。先生方一人一人が大仙市の学校を支えているんだということを実感してほしいと強く願っている。

今後の展望（対談）

三浦憲一前教育長からのメッセージを聞き、一番心に残っていることは・・・

【吉川教育長】

三浦前教育長には、本当に10年間ありがとうございました。実は、私が中学生の頃のある教科の担任の先生であった。特に県の義務教育課に勤務していた時の上司でもあり、今日は、対談とはいっても、「言われたら、はい、はい。」と言うしかないかもしれない。

県には厳しい上司や怖い教育長もいた。三浦先生は、心の広い方で常日頃から部下を大事にされ、六郷中学校の校長、南教育事務所の所長、義務教育課の課長、県の教育次長をされた方であるが、一貫していたのは、学校は一人一人の力もあるだろうが、やっぱり大事なものは総合力であるということ、みんなの力が一つになったところが一番強いんだ、それが組織では大事であるということを教えていただいた。



この10年間は、大仙市が合併して創成期から充実期まで、基礎から発展までを三浦先生がつくってこられた。もちろん、一番は、ここにお越しの先生方のおかげであるが・・・。

このパンフレットの中にある「共・創・考・開」のキーワードを常に頭に入れて目指していきたいものである。このパンフレットの中には、これから話をしようとするものが網羅されている。共に創って考え、開いていくことの大切さをしっかりと受け継いでいきたい。私一人でできることでもないし、学校だけでできることでもない。これからは、地域に子どもたちがいかに残ってくれるのかを真剣に考えなければならない。三浦先生にはたくさん財産を創っていただいたので、それをどう生かしていくかが課題である。根本では心のつながりを持ちながら、交流と連携、そして総合力を重視しながら頑張っていきたい。

10年前を思い出し、今よみがえってくる記憶や思い出は・・・



【三浦前教育長】

笹元先生が平成17年に合併した時から1年間教育長を務められ、私は平成18年4月から赴任した。まだ市町村合併後1年ということで、全体的にまだ落ち着きがないような状況であった。

43校ある中で、この落ち着きがない実態をどう受け止めるかということが課題であったが、学校だけで頑張る時代でもない。地域の方々の声なども聞きながら、どのような形でこの後、将来を見通した学校教育を進めていったらいいのかということ

を踏まえて、「大仙ビジョン」を策定した。今後10年間にわたる教育の流れを想定し、若い起業家や農家の方々や教員代表の方々など様々な分野の方々に集まっていたいて議論をたくさんしていただいた。将来を担う子どもたちをどう育てていけばいいのかということが「大仙ビジョン」にまとめられている。

少子高齢化の時代の中で、「将来自立した子どもたちを育てていこう」、「ただ言うことに従う子どもたちではなく、これが大事なんだよと自分の特色を発揮して一生懸命前向きに生きる子どもたちを育てていこう」ということをメインテーマに据え、いろいろな施策を進めてきた記憶がある。

その後統廃合への対応が出てきた。協和地区、神岡地区、西仙北地区、南外地区で統廃合についての意見がいろいろあった。若い保護者の方々からは、「部活もやられないから統廃合してください」というお願いが強く、地域の方々は、「地域の学校だから大事にしたい」という声も大きかった。やはりその二つの意見がどうしても対立する訳で、説明会の時は、県からも担当者が来て説明していただいたり、いろいろな有識者にも説明していただいたり、教育委員会としても地域の実情を説明したり、そういうことを夜に何回も開いた。あの時は、やはり大変辛かった。正直、夜でないと人が集まらないので、夜に話し合いを徹底的にやった。

そして、他よりも前進した地区から具体的な話を進めていった。協和地区が一番早くから動いていた。あと、スクールバスの問題をどうするかや予算的にどうするかということも含めて、少しずつ解決の方向に向かっていった。

ただし、絶対反対することはある訳で、具体的にはアンケートを実施して7割を超えた地域から、地域の自治会や協議会などにも提案しながら合併が進んでいった。あの時は、やはり大変だった。

現在、他の地域が統合しようとしているが、その時の話を聞くと、部活は勝つけれど生徒指導上の問題でトラブルも起きているとか、学力が落ちたとか、そういう話も聞こえてくる。ということは、私たちのやり方は間違っていなかったなということも感じる。何回も何回も話し合いをもち、そしてどういう形で統合に向かっていくか、統合した次にはどういう姿にしていくかということは何回も議論した。このようなこともあり、統合した後に学校を悪く言うことが発生しなかった。

ところが、急遽、行政の力で統合していくと、統合後に対立だとか争いだとかが起きてくる場合もある。従って、事前のしっかりした説明と対応策が大事だなと今感じている。

5年後、10年後の大仙市の在るべき姿と、それを目指すために必要なことは・・・

【三浦前教育長】

大変難しい課題であり、全国的な課題でもある。日本全体が人口減少であり、その中でも秋田県の人口が先頭を切って少なくなるだろう。大仙市も例えば3年間で子どもたちが千人減ったということ踏まえると、やはり今将来を重要視して意識しながら子どもたちと向き合っていく必要があるという感じを受けている。

例えば、子どもたちにどう元気を与えるかである。25年後に秋田県の人口が70万人になるとうニュースを見た。ということは、今0歳の子どもたちが25歳になるときに、現在100万人を少し超えている秋田県の人口が70万人になるということである。小学生の割合は、秋田県

の場合10%ぐらいであるから、全体が減るということは、小学生も減っていくということである。そうした時に、秋田県あるいは大仙市の子どもたちはどうあればよいか重要な課題である。このことについての解決策を国やどこの県でも悩んでいるところである。かといって子どもたちを地元から離すなどということができるとは難しい問題である。ここに残りたいと思える子どもたちを教育でつくってほしい。

岩手県の方から、秋田県には偉人が少ないのにどうして学力が高いのかという質問を受けたことがある。私は、偉人や歴史だけにすがっているのも問題ではないかと答えた。時代に合わせないといけな。一つのことにとこだわっていると前進しない。古くて新しいものが長続きする。

【吉川教育長】

大仙市で教育を受けさせたいと思ってもらう、ということもある。他県の例もある。大仙市にはそれだけの財産がある。それが子どもたちの自信になる。地域活性化に貢献できる子どもをいかに教育できるか。グローバル社会で生きる子どもをつくる教育は大変である。

子どもがいなくなる地域は問題である。不易と流行がキーワードになる。3.11の震災後、物が全部なくなっても生きる力は残っていた。思いやり、感謝、心の面は不易だと思う。これを育てることを基盤にしたい。地域の伝統も不易。これも大事にしたい。田舎で生きるためには、グローバルな感覚をよリモっていないとはいけない。

そのためには、次の5本を大仙市教育の柱にしたい。

- ①地域に根ざしたキャリア教育。生きる力を育むキャリア教育
- ②基礎学力の定着と活用する力の育成
- ③特別支援教育の充実
- ④スポーツ振興による体力の向上
- ⑤学び続ける生涯学習の推進



フロアから：中仙小学校 池本先生（広島県との交流人事により4月から中仙小へ）

中仙小学校の先生方をはじめ、周りの人の心温かさに何とかやってこれている。秋田に来て感じたことは、次の二つである。



- ①秋田県でも大仙市でも、教科書を大事にして、子どもたち同士の学び合いの中で定着させていく指導を大切にしている。この指導で、大人になったときでも互いに関わり合い、助け合うことができると思う。
- ②教師が教師本来の仕事ができるよう、周りや行政のサポートがしっかりできている。広島県には若い先生がたくさんいる。日々いろいろな問題も起きている。毎年二人くらい新任者が入る学校もある。広島はチーム力が高いと思う。5年後、その中で力になれるように努力していきたいと思う。

終わりに・・・お互いにエールの交換・・・

【吉川教育長】

本県は40歳以上の教員が約90%を占めている。初任者は、これからたくさん入ってくるが、大先輩たちに育ててもらいたいと思っている。今懸念されるのは、ベテランの先生方のキャリアが長いために、なかなか殻を破れないところである。秋田県も広島県に負けたくない。

三浦前教育長は、現在大空大仙の理事長である。幼少期も非常に大事な時期であることから、就学前教育との連携という観点で、大仙教育メソッドの発信のためにこれからもご協力をお願いしたい。

【三浦前教育長】

大仙市は積極的に他県とも交流する姿勢で行っている。沖縄の先生からは未だに手紙が来る。岩手県や北海道もしかりである。知らない地域と交流することによって目が開くこともある。交流が交流を呼んでいる部分もある。お互いによいところを出し合っていきたい。

私は初任者の頃、3教科ももたせられた。特に体育の授業では苦勞した。バスケットの授業で生徒に馬鹿にされた。そこで考えた手法は、家の金物屋での経営が役立った。商売の上でのマネジメントが学級経営に生きた。先生方にも子どもたちにもマネジメントを教える必要がある。子どもたちは、必ず組織と社会に入る。プロの人が来てくれてうれしいのは、失敗談を話してくれること。吉川教育長は、失敗談はあまりないと思うが、そういった面も含めて先生方と仲よくしていただきたい。